

紅梅であつたかもしれぬ荒地の橋 飯島晴子

（句集『朱田』）

先週の土曜日、現代俳句協会の全国大会に大阪まで出掛けた。楽しみはいくつかあつたが、一番の目玉は金子兜太の講演であつた。残念ながら兜太先生の講演はご本人の体調不良で急遽中止になつたが、「代打」宮坂静生の講演も内容豊かで、「熱演」のうちに一時間はあつという間に過ぎた。

その講演の枕に関西出身として紹介されたのが、飯島晴子とこの作品であつた。「地貌俳句」に絡めての引用でもあつたが、解説を聞いて別な部分で驚いた。この句は「鉍毒で壊滅した旧谷中村周辺での作」というではないか。

蛇足だが、本句の解釈は「荒地に小さな古い木橋がかかっている。この橋の木は、もとは（情緒豊かな）紅梅であつたかもしれぬ」というほどのものだ。私流に言えば、「木橋」に触発されて「紅梅」を幻視した作。作者の出身を思えば、「紅梅」京の情緒Ⅱ季語の雅な原風景」を作者の内部で否定せざるを得なくさせるほど、東国の「荒地」は無惨

な姿を晒していたのだろう。

それにしても、「古い木橋」から「紅梅」を引き寄せる感性は比類なく豊かだ。私自身も同地で毎年のように句作を重ねてきたが、さすがに「紅梅」には辿りつかなくつた。眼前のモノ（Ⅱ木橋）にはその奥に本来の姿（Ⅱ紅梅の木）が原風景的に凜として顕つ。俳句で言う「モノを見る」というのは、この不可視の奥行きを感受し、モノの変容を自分の心象風景の中に見届けることだ、と改めて教えていただいたような気がする。

『朱田』（昭和五十一年・永田書房刊）を手にしたのは学生時代。その頃、仲間たちと飯島晴子指導の「鷹」の支部句会に一度参加したこともあつて、作者の句は好きだつたが、『飯島晴子集（自選百句選）』（一九八七年・牧羊集刊）を読み落していたらしい。さっそく古書を取り寄せたが、思わぬきっかけから新たな感激に浸っている。やはり大阪に行つてよかつた。

（平成

二四年一〇月二九日）

神もあとたれて千歳を月かなし 其桃翁

（赤間神宮句碑）

先日、中村石秋さんの「其桃」八十周年記念大会に下関を訪れたときに、二日目の吟行会で出遭った句である。二日目は降ったりやんだりで、風が強く冷え込んだ一日となった。

其桃翁とは、西尾其桃（にしおきとう）（一八六八〜一九三一）。現在の神戸市垂水句奥畑に生まれ、後に下関に移住。医家としての生業の傍ら美濃派の俳諧を広め、俳句機関紙『其桃』を興した。無名庵十七世（追号）でもある。俳誌「其桃」は、この西尾其桃に始まり、西尾桃支、西尾豊、中村石秋と継がれて今日に至っている。

さて、この句は、赤間神宮の七盛塚（平家一門の墓）への入口の山際に立つ句碑に刻まれていたもの。赤間神宮は、幼帝・安徳天皇を祀っている。壇之浦の戦いに敗れ、祖母・二位尼（平時子）に抱き上げられ、「波の底にも都の候ふぞ」と慰められて入水する場面は、平家物語のクライマックス

でもある。

この句碑の意味については、まだ不明なところもあるが、赤間神宮の句碑のなかで一番印象が深かった。おおよその句意は、「神もその跡にお降りになり、以降千年を月の光が照らしているのも悲しいことよ」とでもなるうか。おそらくは、安徳天皇の入水等を意識して詠まれたものかと思う。

この句は、単なる眼前の風景を捉えた客観写生でないことはもちろんだが、単なる叙事詩でもない。「神もあと（＝跡）たれて（＝垂れて）」の部分に想像力が働き、「千歳を月かなし」部分は主情的である。「たれて」の一語の示す垂直性の中に、おのずから壇ノ浦の海中の「都」へ月光が降り注ぐさまが見える。また、不可視の神を感じ取りながら、想像力を駆使して「入水その後」の時間を「千歳」の誇張表現によって定着させた。こうして、編み直された大きな時空の物語性が、作者の心の中に棲みつき始めたのである。悲史を見つめたなかなか大きな作品ではないか。

（平成二四年十一月二八日）

艦といふ大きな棺沖繩忌 文挾夫佐恵

(句集『白駒』)

文挾さんの第七句集『白駒』が昨年暮に刊行された。この一月には白寿を迎えられたが、この句集に収められた六年間の四百五十六句は、ひとことと言えば「深くすこやか」。九十歳を超えての瑞々しい「生」の感覚と、一世紀を生き抜いてきた思いの深まりが、自然な息づかいとなつて一句を生む。「いま」から未来へ過去へと、複合的な目を心の中に持ちながら、自在に晩年の心象風景が編まれる。「艦」は「ふね」ではなく「かん」と読むそう。字義は「いくさぶね」だが、この文字からは近代的な軍艦を思うのが自然であろう。もちろん、沖繩戦で「艦」といえば、真っ先に思い浮かぶのは「大和」だ。だが、この句では「大和」ではなく一般的に「艦」と言ったために、「大和」以外の自国の戦艦にも思いが広がる。さらに勇み足を承知で言えば、敵の軍艦まで含意は取込み可能だ。どの「艦」にも兵として乗っていたのは、多くが純粋な若者だ。さらに、その先に見えてく

るのは「沖繩」自体である。(本土防衛のために) 島に閉じ込められ多数の犠牲者を出した「沖繩」こそ紛れもない「艦」(＝大きな棺)であった。「艦」は「沖繩忌」の本質でもあったとも言える。文体的には、「艦といふ大きな棺」は「戦艦は(大きな)棺のごとし」と書くこともできる。「ごとし」と直喩を用いると、棺の形態がまず見えてくる。棺を比喩の対象にした誇張法とも言える。それに対して、「艦といふ大きな棺」の方は、「艦」の本質を思索したような深みを感じられる。この句は客観写生ではない。沖繩戦の「艦」を心の奥に据え、「死」のあり方を形態的にも意味的にも通底する「棺」をもつて、可視化したものだ。心象を意味的に組み立て可視化してゆく作業は、石原八束の内観造型に通じる。戦争というものは、雄々しく軍艦(や戦闘機や戦車など)を建造させるが、その本質が「棺」であるとは判った時、予め組み込まれた悲劇性と人間の愚かさが如実に浮かび上がる。

〈炎天や一片の紙人間ひとの上に〉(戦死とは何なりし満つ霜の声)と鎮魂の思いを詠み続けてきた文挾さんの白寿の重みが、上掲の句には結論のように深々と感じられる。

■ 続らくだ日記 (四) ■

されど生きん桃に灯影の一つ一つ 川口重美

(『川口重美句集』)

私の句集『天樹』(現代俳句協会刊)の編集を担当してくださった劔持劔二さん(「港」同人)と暮れに酒置歓談していたところ、「川口重美ってご存知ですか。夭逝した東大出の俳人ですがいい作品を残していますよ」とご教示いただいた。次に打合せでお会いした折、劔物さんは約束を忘れずに『川口重美句集』を持参し、貸してくださった。上掲の句は二十四句ほど共感句を書き抜いた中の一句である。

川口重美は、大正十二年下関市に生まれ早くに両親を失う。その後、下関中学校、山口高校理科、東京帝大第二工学部建築学科と進み、そこで東大第二工学部俳句研究会に参加する。「ホトトギス」「寒雷」「馬酔木」などの投句に加えて、昭和二十四年には沢木欣一の「風」同人になるが、下関に帰り、二十四年四月に二十五歳九か月で自殺する。たまたま「俳句」三月号の連載エッセーに、宇多喜代子さんが川口重美を採り上げている。幼な

妻との結婚後、年上の戦争未亡人と同棲しやがて心中へ到る道すじや代表作品などについて、詳しくは「俳句」の本文に譲るが、「大正二桁から昭和一桁、それも昭和五年生まれまでくらの青年たちの戦後は、精神のバランスの不安定を克服するところから始まったのだ」との一文は、いまの時代からは次第に見えにくくなっている貴重な発言だ。

渡り鳥はるかなるとき光りけり

川口重美

この句はたしかに川口重美の代表句に違いないが、発想が見えやすい気もする。「俳句」に載っていない句で私の好きな句を付け加えると、「白服の筈のごとくに佇ちにけり」(水の顔を水が流るゝくるとんぼ) (へしんしんと飢うるこころや蛇殺し) (へまくなぎに入れたるこの手不倫の手) など。青年の背徳的な心情への吐露が痛々しいほど伝わってくる。冒頭の句は、最初期(一九四四〜四七)のもの。「されど」の含意するものは謎だが、生への意識が過度の力みを伴って痛々しい。それでも灯影に浮かぶ桃の一つ一つの穏やかな表情を眺めながら、心和らぐひとときがあったのかもしれない。(中年や遠くみのれる夜の桃 西東三鬼) の暗喩性とは一味異なる「桃」の実在感がこの句にはある。

邯鄲の夢とも空をゆく火とも 石原八束

(遺句集『春風琴』)

平成九年作、つまり世を去る前年に鈴木詮子の死を悼んで十四句を詠んだ中の一句。「盟友 鈴木詮子 逝く 十四句」と前書がある。他の句は「邯鄲の啼くうす闇に魂かへる」(酒癖のあとのトラジよ 爛熱し)「君の死にまむかへば詩(うた)生きる秋」(秋のうた十ばかり捧げ空に泣かむ)など。鈴木詮子は八束にとっていかに大事な存在であったか。俳誌「秋」創刊以来、詮子は八束に師事し、八束の作品の評論に力を注いだ。何度か句会後の酒席を一緒にさせていただいたが、晩年の詮子さんがあるとき、「八束は、年に二、三度、絶対に敵わないと思うほど凄い選をする時がある。自分はそれが楽しみで句会に出ている」と仰った。このときの言葉は、自分がいま句会の選をするとき、時折脳裏をかすめて猛省を促すのである。さて、上掲の句は、(詮子の一生は)邯鄲の夢であったとも、空を飛び去ってゆく火のようでもあつ

た、と言うのである。もちろん、「空をゆく火」は詮子が零戦のパイロットだったことを踏まえての措辞とも思えるが、その手がかりはこの句の中にどこにも見当たらない。だから、この読みをあれは私にとらない。

さらに、この句の「邯鄲の夢」は八束自身の来し方を振り返っての感懐にも受け取れる。自らの世の短さを儂みながら、中空を過ぎてゆく詮子の火の玉(魂)に別れを見ているのである。

いずれにせよ、この句は「邯鄲の夢」という故事と「空をゆく火」の合成である。いずれも一般的には非現実的な世界である。しかしながら、前書付きで「邯鄲の夢」と「空をゆく火」が並記されると、八束がいま詮子の「邯鄲の夢」に自らの思いを重ね、その奥にある故事の時空を引き寄せながら眼前の中空を仰ぎ、そこに火の玉(詮子の魂)が飛び去ってゆくような、重層的な時空が感じ取れる。

この句の「邯鄲」は季語ではない。無論、八束は原則有季定型俳句の主張者である。が、この句において、自然に出来上がった鎮魂の思いを優先させたのであろう。

戦争が廊下の奥に立ってゐた 渡邊白泉

（昭和一四年作）

愛誦していながら評論や解釈なども出揃って、いまさら書くこともないと思われる句がある。だが、この辺で自分の確認のためにも一度は整理しておいてよいだろう。昨秋いただいた『疾走する俳句く白泉句集を読む』（中村裕著・春陽堂刊）を拝見しながら、そう思ったのである。

この擬人化された「戦争」の大もとは「歩哨」や「官憲」だったらしいが、この句の要は「庶民の家の薄暗い廊下の奥にまで、物の怪のように戦争が侵入してきている」（中村裕・本文より）イメージ作りによって、「戦争」の真の恐怖を明示したところにある。それは、国外の戦場での死との正対のみならず、銃後の庶民生活の中にも、貧困や身内の死という悲しみに加えて、国家総動員体制の名のもとに言論統制、弾圧など個人の存在理由の根本である「自由」の強制が瞬く間に影のように入透するところにもある。

方法論的には、いきなり「戦争」という観念語を

擬人化してイメージ化を図った効果が出ている。「戦争」と言う語は、季語の「雪月花」と同じくらい、社会的にも文芸的にも上位の概念語である。当時二十六歳の若者であった白泉は、いきなりこの大きな語を手玉に取ってしまったのだ。この大胆な擬人化により、当時白日に晒すことが禁忌に近かった「戦争」の本質と恐怖を、ぬらりとした影と共に視覚化し、瞬間的に読者に認知させてしまった。上位概念語の使用に伴うスローガン化やステレオタイプ化の陥穽をさえ、白泉の詩想はすりと通り抜けてしまったのである。時代の現実と根差しながらも、通俗的でない普遍性を得たところにこの句の非凡なところがある。

一読、文脈の意外な展開に瞬時に惹き込まれてしまいが、再度ゆっくりと音韻をたどり直せば、鋭利な上五の「さ」音、奥聞へ引き込む中七の「お」音、あつけらかなとした下五の「た」音が順次に働き、心理的な揺れを引き出す。口語的なシャープな発想の流れと、「ゐた」の文語表記の走り過ぎない視覚的安定感。そのアマルガムが生んだ絶妙な心理的陰翳の中に、社会批評が文芸的にも豊かな暗喩性を得たのであった。

ゆゑなくて言持たぬ日の浮氷 鈴木八洲彦

（句集『浮氷』・現代俳句協会刊）

作者は、宮城県松島在住の「俳句饗宴」主宰。一昨年の三・一一の東北大震災に遭遇され、ご心痛の程は察するに余りある。代々引き継がれた俳誌の創刊七百号を目前にして、この状況を乗り越えようと気持ちを奮い立たせて纏められたのがこの句集である。たまたま、微力ながら本句集編集のお手伝いをさせていただいたので、完成するまでの数か月間、私自身も上掲の句に向き合って問答を繰り返した。春先とは言え、作者の重い心もちがしずかに伝わってくる句として、心から離れない日が続いたのである。

上五中七は、ひとまず「理由もなく、言葉など持ち合わせない一日であることよ」くらいの意であるとおこう。では、なぜ「言葉を持たぬ」と言うのか。それは、ジャーナリズムの煽る世間一般の励ましや慰めの言葉とは別な意味で、今回の大震災の大きさの前に、俳句の言葉の無力感を思い知らされたからではないか。自覚の深い俳人

ならばこの巨大災害に対して現代俳句の表現領域・方法の可能性を、真摯に追い求めるはずだが、そのたびに、季語をはじめとする言葉の無力感に拉がれる。「ゆゑなくて」とは、だから逆説的な前提部と受け取れない訳でもない。

ところで、「浮氷」は、その日に張った「薄氷」とは異なり、真冬からの氷が、春先の暖かさで少し溶けて割れ、水面に浮かんでいるもの。氷の質感も重ければ、氷解けと言っても溶けきるには日数がかかる。さらに、今回の震災では、魚ではなく、人間をはじめ多種の生物の命が押し流されたまま閉じ込められていて、氷が解けても蘇生するわけではない。それを思うと、春の兆しは知りながらも、心の奥底が春めくまでにはまだまだ歳月がかかる。

その歳月の長さを自覚しながら、それでも生を得た者として、周囲の人たちと前向きに生きなければならぬ。俳人として言葉を持つとうとすればするほど、現実の大きさに押し戻されてしまう。いつそ言葉を持たない方が楽かもしれない。そのような葛藤の途中で訪れた、ある日の虚脱したような茫然自失とした一俳人としての表情がこの句に深く刻まれているような気がするのである。

ガザ空爆飯を喰う手はどっちだ 中内亮玄

（句集『蒼の麒麟騎士団』・孤尽出版）

昨年、現代俳句協会新人賞を受賞されたときに、一読印象の深かった一句。今回、この句も収録した句集を刊行された。「空爆」と「飯喰う手」との言葉間の落差も大きく、尖鋭的と言っても思索性も深いのが特色である。

「ガザ空爆」というのは、言うまでもなく、イスラエルによる再三のパレスチナ自治区ガザへの空爆のこと。イスラエルとパレスチナの勢力不均衡は一目瞭然で、空爆の被害は数多くの市民にももちろん及んだ。だが、作者は安易に偽善的な平和主張の押しつけはしない。政治的主張を短絡的に述べるだけならば、スローガンの句に陥る。

この句の解釈は二通りあるうか。第一は、日々の「ガザ空爆」のニュースに接しながら、自分の日常生活を顧ると、「箸の持ち手は右か左か」など生死の一大事とはまるで離れた煩瑣的な事に拘泥している。その通俗的であり方の自分を、自嘲気味に描いているという解釈である。

他方、これと通底しながら、もう一つ踏み込んだ解釈もあるう。想像力を駆使して、ガザ空爆を続けている爆撃手に突然「飯を喰う手はどっちだ」と問いかけてみるという設定である。この虚を突く問いに、爆撃手は即答できまい。異常な空爆の中で、「手」はいつの間にか、日常生活での役割を忘れ、爆撃のボタンを押し続ける道具に成り下がってしまったのだ。空爆に集中するあまり、日常性の根っこでもいいうべき「飯を喰う手」を体が忘れてしまうとは何事か。おどけたような間によって、ガザ空爆の狂気が如実に浮かび上がる。

そんな通俗的な役割さえ喪失した爆撃手の「手」によって軽々と無惨に殺されていく人たちの痛みは、どうやって救われると言うのか。読者はおどけたような文体から、その痛みの構図をさっと感じ取れるはずである。

今回の句集では、次の一句にも新たに注目した。立ち葵びらびら咲けばびらびら泣く 亮玄

この作者の通俗的日常性に根差した詩的発想には、雑草的な逞しさに加えて他人の痛みへの熱い共感性が伴う。今後の句の展開が楽しみな次世代作家の登場である。



遙かなる十字架に裂け通草の実 有馬朗人

（句集『流轉』・角川書店刊）

この句は二〇〇六年作。「天為」の錬成会で島原の原城跡を訪ねたときの作だったと記憶している。もちろん、「島原の乱」の悲劇の地である。島原藩の苛政とキリシタン弾圧が引き金になって起きた島原・天草の農民一揆は、少年天草四郎を盟主として真冬の原城に立てこもる。その数三万七千とも言われるが、その中には老人や女性・子供も多数含まれている。一方、幕府軍は十二万五千と言われ、キリシタン殲滅の目論見と軍勢の優劣は明らかだが、一揆の群集はよく耐え籠城戦は三か月に及んだ。最後は、幕府軍が援軍オランダ船からの砲撃を交えた総攻撃を行い、一揆軍は壊滅、全員殺されたとされる。（異説もあるようだ。）のちの発掘の際に、空壕跡などにロザリオや十字架などと共に人骨が無数に見つかった。私たちが吟行したときには、本丸跡の秋空の高い所に十字架が建てられていた。この悲劇をどう詩的に詠めるか大変悩んだ吟行会であった。どう詠んでも散文的

で、人骨・島原・天草四郎・ロザリオ・クルス・オラシヨ・砲撃・城等々、単語が脈絡なく躍り合っただけで、求心力ある語がいつこうに現れない。後日必死に推敲を重ねたものの、句集にはへ幻の城ロザリオに頭ち露うごくへロザリオの呼びだす城や雁来紅へ万骨のオラシヨに月や亡き城にへのみ収録という不本意な結果に終わった。昔の悲劇のイメージ作りに走り、一句としての隠喩性や象徴性に至ってないのであった。

だから、その夜の句会で冒頭掲出の句に出合った時、この句の象徴性にあつと息を呑んだ。城址の空に実際に懸かっていた十字架、そして歩きながら見つけた通草の実。この二つの素材だけで、一揆の民の崇高な信仰心と、無惨に裂かれた人々の命が、澄みきった秋の空気の中にくつきりと描き出されている。季語の「通草の実」は澄んだ秋空を呼び出し、心の中の遙かな高みをも引き寄せたのである。

前書はないので、解釈を島原に限定する必要はない。だが、この句の悲劇性は紛れなく伝わってくる。俳句形式の中で、歴史という眼前には見えない世界をいかに端的且つ詩的に編み直すか。この句から学んだことは大きい。

飯田蛇笏忌大露の深空より 飯田龍太

(昭和五十三年作・句集『今昔』立風書房刊)

学生の時たった一度「雲母」の大会に参加したことがあったが、その時に発表された句。当時の龍太は、へ葱抜くや春の不思議な夢のあとへ瀧音の鼓(こ)にのる月の花辛夷へ山越えて刻のあとゆく春の風へ遠山火寢息生絹(すずし)のごとくゆれへ裏木戸の音の彼方へ天道虫へなど、言葉捌きの華麗な句を毎月発表していた。その龍太を見たかったのだ。大会の時、上掲の句は多くの票を集めたが、私は言葉が頑張りすぎだ、とパスしてしまった。「蛇笏忌や露のひしめく甲斐の空」くらいを求めていたのである。もちろん、龍太の「露」の句と言えば、代表句はへ三伏の闇はるかより露のこゑへ鶏鳴に露のあつまる虚空かなへの二句だと思うが、蛇笏忌の十月になると思い出されるのは、この「大露の深空」の句なのである。どういうことであろうか。

もとより龍太にとってはへ露の村墓域とおもふばかりなりへの通り、初期より「露」は死と親しき

季節現象であった。「露」は甲斐の山河いちめんにしつとりと輝き、浄土へと経巡る祖たる血脈のよなものであったに違いない。だが、先の句では「飯田蛇笏忌」と大きく打ち出した勢いに、「露」は寸時に「深空」に映し出されてしまった。「露」は須臾にして乾坤に行き渡ってしまったのである。そして、空の深みから「飯田蛇笏忌」が降臨してくる気配が生まれた。不可視の忌日が燦然と匂い立つようではないか。

「露ひらく」「露しげき」「露ひしめく」などの形容語との連結では、分かりやすいが説明的で「大露」という名詞の持つ濃密さと引力は出ない。「飯田蛇笏忌」「大露」「深空」と、立て続けに大見得を切ったような句だが、関係性は「の」「より」のみで示唆し、あとは作者は何も言わない。その結果、露のひしめく空の深みから「飯田蛇笏忌」が現れる。もちろんこの句の力みや誇張性を無条件に肯うわけにはいかないが、昨今、感覚を腕づくで押し出そうとするあまり、ついつい説明過剰に陥ってしまう我が句を猛省しつつ、省略しきったこの句の不思議な強さと懐かしさを感じるのである。人界を包み込む大らかで鮮烈な空無の世界がここにあると言ったら言い過ぎだろうか。